

# 「地域で暮らすという事」

## その3

# みんないっしょでいいしょ

たすけあいワーカーズ「むく」代表  
石川 絹子

十月から、六五歳以上の第一号被保険者への介護保険料徴収が始まったが、来年の九月までの一年間は、国の特別対策で本来の保険料の半額でよいということだ。保険料額が市町村ごとに異なり、前年度の所得額に応じて五段階に分けられて、年金からの天引きが原則となっている。

民間の保険のように、集金や銀行等で自分のサイフからお金を払うのとは違い、年金が減っている訳だから、取られていると感じるかもしれない。また、「負担するから利用しないと損だ」と思ってもかもしれない。しかし、認定を受けサービスを利用してある人の中には一割の利用料負担があるので、負担額を低く抑えようと、サービスの利用を控える場合もさらに

増えると思われる。介護保険制度という福祉に市場原理が導入され、民間事業者が新たに参入したが、サービス利用者が予想を下回り、採算が取れず、縮小や撤退を余儀なくされた事業者が出てきている。今後、顧客獲得のために価格競争が始まる可能性もあるという。

しかし、大切な介護をお任せするのに、はたして価格だけで事業者を選ぶのだろうか。古くからヘルパーの派遣をしていた社会福祉協議会や市町村の委託事業者が、大手事業者のマスコミを使ったコマースャルにも負けなかった訳で、利用者の立場としては、家の中に誰を入れるかが問題で、どこの誰でもいいとは思っていないからだろう。馴染みの人がやっぱりいいのかなと思う。多くの人



## 石川 絹子 (いしかわ きぬこ) さん

南富良野町生まれ。

釧路赤十字看護専門学校卒業後、臨床・診療看護婦となる。

1994年たすけあいワーカーズ「むく」を設立し代表となる。

1999年10月たすけあいワーカーズ9団体による「NPO法人北海道たすけあいワーカーズ」の代表理事に就任、現在に至る。

4月からスタートした介護保険制度では、「指定居宅サービス事業者」の指定を受け、事業展開をしている。

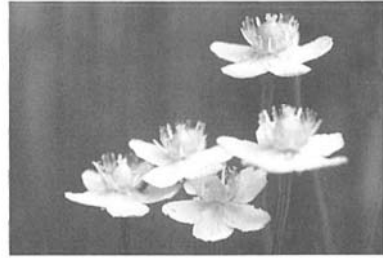
は、価格やイメージで事業者を選ぶのではなく、実際にサービスをしてくれるヘルパーに信頼を寄せて、選んでいるのではないだろうか。

また、最近の新聞によると、草むしりや窓ガラス磨き、ペット等の散歩や餌やり、草花の水やりは、ヘルパーの仕事ではないと厚生省からの通達があったと載っていたが、はたしてそうだろうか。

高齢になったり、身体に障害をもったりしても、ちょっとした手助けがあれば、在宅生活が続けられる。在宅で生活するという事は、心豊かに自分らしく暮らす事であって、最低限度の生活に我慢して暮らす事ではないと私は思っている。地域に根ざして活動してきた福祉系のNPOは、様々な「困った」に 대응するサービスを提供してい

る。小規模民間企業やNPO法人が、質の高い満足のいただけのケアを提供し、地域に認知されることで、私たちの老後も明るくしていける。ヘルパーという職業は、一人ひとりのニーズに柔軟に対応される、日常生活援助の専門家であり、責任も重くて大変な仕事だ。中にはお金を払っているのだから、何でもやってくれて当たり前と思っている利用者もないわけではないが、一緒にどうしたらいいのか、何を援助すべきかを相談しながらやっていきましようという事を私たちは目指している。

ところで、最近「バリアフリー」とか「ノーマライゼーション」という言葉をよく耳にするようになった。高齢者も障害がある人も、皆が共に暮らす、本来あるべき普通の



状態に戻すことがノーマライゼーションで、共に暮らしていくのを阻む障壁を取り除いた状態をバリアフリーという事らしい。

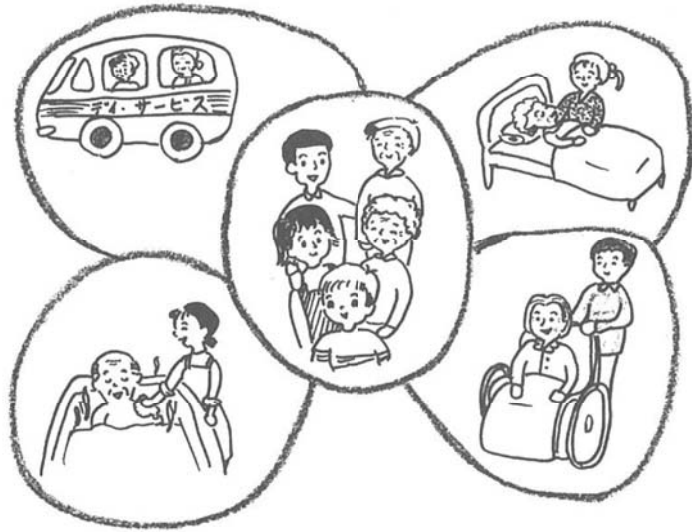
障害を持った子供が、小学校や中学校と進むうちに、まわりからいなくなっていくように感じませんか？それは教育を受ける為に、校区外や他の町の学校なり施設へゆき、いわゆる健常者の生活の中から、隔離・収容されてしまっているだけで、そんな反福祉的現実がまだまだあるということだ。「まちの中で自立した生活がしたい」と行動を起こした人たちがいて、やっと上記の言葉が浮上してきたように思う。

街で暮らすための家や道路や公共の施設など、高齢者や障害者にとって使いやすさい造りになっているだろう

か。そういう人を見かけた時に、さりげなく手助けできるような人がどのくらいいるのだろうか。

私事だが、二年程前の冬に足を骨折した事があり、一ヶ月程松葉杖のお世話になった。その時には、一歩外へ出るのもどんなに大変な事かということを実感した。階段は上がる事はできても、降りる事は恐ろしくて出来なかったし、ドアを開けることは押すのも引くのも難しく、公共の乗物には乗る事もできなかった。娘の卒業式には杖をつけて出席したが、そのために必要な荷物が手に余り、移動するのに難儀した。病院でさえ、自ら車椅子を貸してくださいと言わなければならなかった。

「五体不満足」という本を出した乙武洋匡さんが、その



さわやかな笑顔で電動車椅子に乗って登場してからは、随分と障害をもった方への見方が変わったように思う。その著書の中に「環境さえ整ってれば、ボクのような身体の不自由な障害者は、障害者でなくなる」と書いていた。また、「障害者に対する理解・配慮はどこから生まれてくるのだろうか。ボクは、「慣れ」という部分に注目している」ともあった。

普段の生活の中で、「おはよう」「お疲れ」と挨拶するように、歩いていて人にぶつかったら「ごめんなさい」というように、人にお世話になったら「ありがとう」とお礼をするように、声を掛け合う事は普通のことだと思う。それは自然であたりまえの事で、それと同じように、困っている人を見かけたら、

「どうしましたか？」と声を掛ける事に慣れていないだけの事。「心のバリアフリー」は、昔は普通の事だったはず。それから、いわゆるハード面の施設や建物については、障害者や高齢者にやさしい造りであれば、子供にも誰にでも使いやすいって事だと思ふ。これはみんなで声を出し合って、行政や企業を動かしていかなければ変わっていかないのかと思われる。

街にはいろんな人がいて当たり前、みんな一緒にいしょや。まだまだ様々な偏見や差別があるけど、五体満足な人だって、いつ事故や病気で障害を持つかわからないのだから、人にやさしい「まちづくり」を一緒に始めてみませんか？ みんないしょでいいしょが普通の暮らしになるように……。